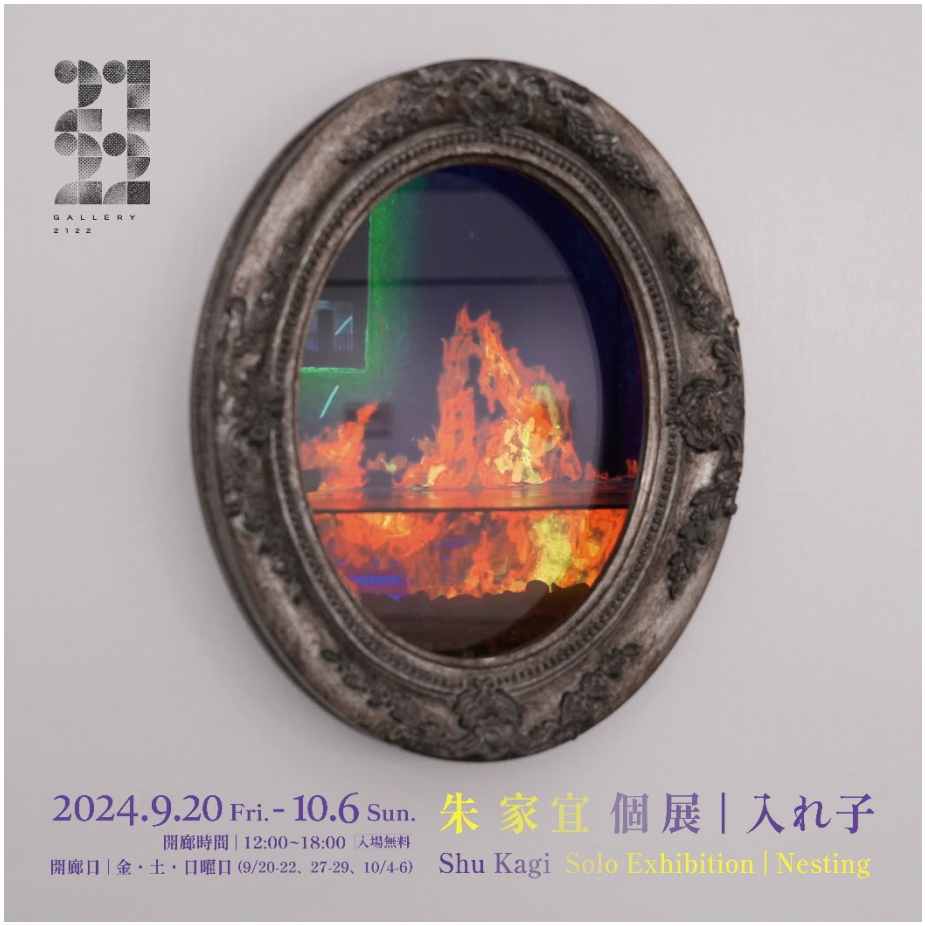
朱 家宜 個展｜入れ子

2024.9.20-10.6 Gallery2122

朱 家宜さんインタビュー



―これまでの作品制作についてお聞かせください。

　大学生のころはキャラクターデザインを専攻し、主にデジタルコンテンツを学びながら制作活動を行っていました。そのなかで、絵具などの素材を手で触れる感覚を大事にしたアニメーションをつくりたいと思うようになりました。そして、大学院に入ってから、手描きアニメーションを展示する空間についても考え、インスタレーションとしてつくるようになりました。制作中は、インスピレーションが沸いた瞬間の一番核となるポイントはどこか、しっかり心のなかで掴んで、最後までそれを離さないことを心がけています。

―今回の展示作品について、お聞かせください。

〈災難のあった部屋〉2021 年-2023 年

この作品は、鏡の枠、映像モニター、水で成立する作品です。あるとき、自分自身が無意識のうちに、女性としての怒りを抑えつけていることが多いことに気づきました。時間が経ち、傷を伴いながらその怒りを実感することがあります。そこから、水を通してみえる炎をつくりたいなという思いが芽生えました。

―テーマである女性としての怒りと、水、そして円のかたちをした枠が、女性の身体と重なり、自分と鏡うつしになっているように気がします。

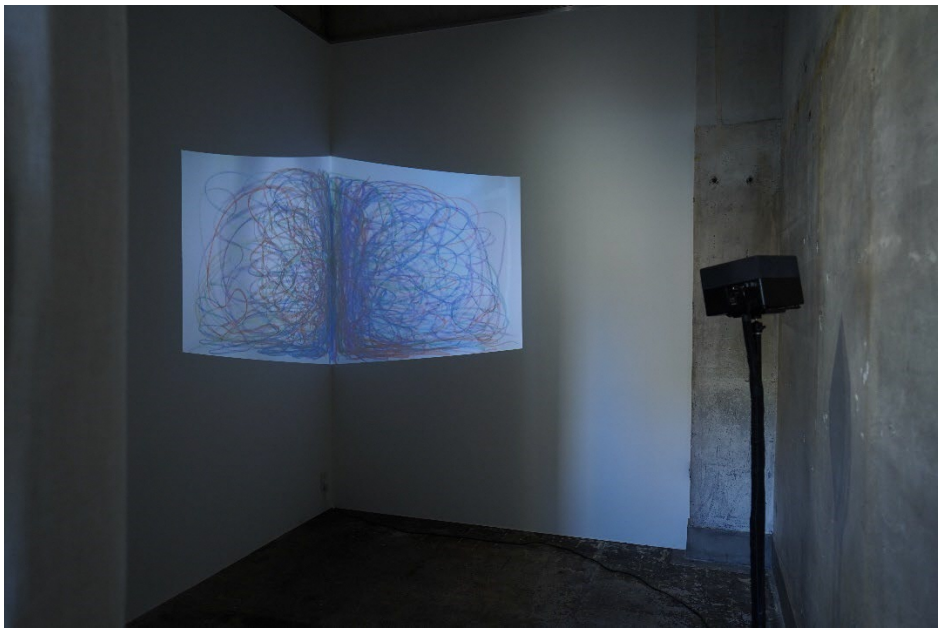
鑑賞者の方がこの作品を見たとき、性別問わず自分自身を見ているようだと話す人が多く、興味深かったです。また、後ろの映像は、タロットカードの「月」をアレンジしたものです。以前住んでいた街で、コンビニから出た瞬間、高い建物の間のちょうど真ん中に月が見えた日がありました。「月」のカードには、二つの高い塔の真ん中に月が描かれています。それが実際の生活のなかで見た景色と重なったことに感動して、作品にしたいと思いました。二つの塔は、意識と無意識の象徴として描かれていて、常に気づけるわけではありません。だから映像でも、消えたり、現れたりするようにつくりました。

〈目覚めて、電話する〉2024.09

この作品は、受話器からの声を聴きながら見るアニメーションです。昔から、寝ているときにみる夢が不思議で魅力的に感じ、目覚めたらすぐに思い返しながら、人と電話でお喋りをしたり、文章に起こしたりしていました。夢は私にとって、昔の出来事を思い起こさせてくれる、大事なメッセージのように感じています。

―受話器を手にとって耳に当てるという動作から、自分の過去ともリンクするような懐かしさを感じました。

ありがとうございます。この作品は、受話器で声を聞くことと、ナレーションの物語に集中させるようにしています。使用している電話、窓枠、椅子はすべて古いもので、人の気配や、ぬくもりを感じるものを選びました。


〈肌色の箱〉2024.09

この作品は、こいけはるなさんの曲〈黒い星〉に映像を付けるため、制作しました。曲の歌詞は「新しい名前を考える行為は既成概念と戦う術」という思いで書かれていたと聞きました。そのテーマでアニメーションをつくりたいと思い、はじめは哲学的なストーリーを語る脚本を書いていました。ですが、テーマに立ち戻ったとき、計画的に考えながら組み立てるアニメーションこそ、既成概念に囚われていたことに気づきました。わかりやすい言葉や考え方ではまとめきれない、人の感覚がたくさんあるのではないでしょうか。言葉は「箱」のようで、自然と湧いてくる感覚を確かめるために、その「箱」に自分たちを無理やり入れようとしてしまうのです。人が自然体であるために、なんらかののびのびできる状況をつくってあげなければと思いました。そこで、書いた脚本を廃案にして、芸術療法のエクササイズを用いました。映像のなかで行ったパフォーマンスは、書籍『Healing Trauma with Guided Drawing: A Sensorimotor Art Therapy Approach to Bilateral Body Mapping』（Elbrecht, Cornelia. 2018. North Atlantic Books）で紹介されている Bilateral Body Mapping というエクササイズがもとになっています。大きな紙の前で、両手で同時に絵具を掴み、目を閉じながら、〈黒い星〉のリズムに合わせて心地の良い動きを繰り返します。

―インスタレーションの制作は、展示する空間も大きく影響すると思います。Gallery2122 で展示したことは朱さんにとってどのような経験でしたか。

周辺のお店や、街の雰囲気なども含め、この場所に合うようにインスタレーションを制作しました。また、展示室の中はコンクリートでできた壁と地面に歴史が感じられ、人の存在を引き立たせるような柔らかさのある空間だと感じました。

―ギャラリーに入ったとき、まるで朱さんのお部屋に来たような安らぎを感じました。

この展示室を初めて見たとき、カーテンが思い浮かんだんです。私たちが住む場所、家のような。そのように意識したので、そう言っていただけて嬉しいです。

―「入れ子」というタイトルには、どのような思いが込められているのでしょうか。

修士課程で記憶についての理論を勉強するなかで、ひとつの夢が思い浮かぶとき、すでにその夢の記憶は消え、新しい層が重なっていくという理論を知りました。そのことから、人は今を軸に生きていることをあらためて認識しました。

「入れ子」というタイトルは、過去の自分には戻れなくても悲しむことはなく、自分の一部として内包した、今一番大きいサイズの入れ子として、存在しているのが人なのだと、受け入れるような思いを込めて名づけました。

―人やその内面にあるものは移り変わるけど、ここにあるから戻ってこれる、そんな場所にもなっていますね。最後に、展示を鑑賞した方へメッセージをお願いします。

私の作品に正しい解釈はなく、見る人それぞれで変わりゆくものだと思っています。ありのままで見ていただけたら嬉しいです。

（インタビュー：2024 年 10 月 5 日）

プロフィール

朱 家宜 （ 朱 芸然 ）

2022 年京都市立芸術大学大学院修士課程修了。日頃見る夢や瞑想をヒントに、アニメーションなどの手法を用いて、一枚の絵の持つ素材感と意味に焦点を当て、鑑賞者と作者自身の無意識を写し出す表現を試みる。また、展示空間に合わせたインスタレーションとして作品を再構成する。「Center art festival Tokyo 中央線芸術祭 2022」(KOGANEI ART SPOT 2F / 東京)に選 抜されるほか、グループ展「〇〇が連続された時」(京都精華大学ギャラリー テラス)を主催。